



負けないで

おおさき かなこ
大崎 佳奈子

在中華人民共和国日本国大使館・經濟部

青海省の省都西寧から寝台バスで16時間。玉樹チベット族自治州結古鎮（チベット語名ジェクンド）は海拔3700メートル、遠くには冠雪の岩山が見え、巡礼者が飾った色とりどりの旗が青空に映える、正真正銘のチベットの村だった。村のはずれの高台ではチベット仏教のお寺が村を見守り、広場にはチベットの英雄叙事詩の主人公であるケサル王の銅像がそびえる。チベット東部のカム地方に属し、男性たちはカムパと呼ばれ昔から勇猛果敢さとイケメンぶり（？）で有名だ。行き交う人の多くはチベットの民族衣装を着て手には数珠とマニ車を持っている。経済発展からまるっきり取り残されたような村。そんな村を4月14日午前7時49分マグニチュード7.1の地震が襲い、執筆している今現在、死者2200人以上と報じられている。国家主席、総理と相次いで現地入りし、がれきの山と化した村の復興を約束している。しかし、現地はヤクの飼育と青稞程度程度の作物しかとれない国家級貧困県であり、海拔の高さと寒冷気候であるため、建設工事ができるのは年に4ヶ月だけ。政府は高原生態旅行都市として被災地域を復興する計画を立てているようだが、黄河、長江、メコン川の三大河の源流が集中する地域であるため、行き過ぎた開発は素人目にも環境破壊が懸念される。

亡くなった2200人余りの中に、現地の孤児院の

支援活動に来ていたボランティアの香港人がいた。彼は孤児院の子どもと先生を救い出した後、襲ってきた余震でがれきの下敷きとなり命を落とした。彼のボランティアとしての半生を語るテレビ報道を見ながら、中国でもボランティアの存在が普通に認識され、市民権を得つつあることが感じられた。

上海万博が始まり、経済発展ばかりが目目されるが、「困っている人に救いの手をさしのべる」ことを職業として、非営利のボランティア活動に全身全霊をかける人も存在する。先日、北京の農民工支援NGOが主催するボランティア育成セミナーに参加したとき、あれっと思った。集まった数十名のNGO活動家たちが醸し出す雰囲気は日本のNPO・NGO参加者と同じ、または組合の支部長や執行委員に似ているのだ。みんな本物の「志願者（ボランティア）」だ。

セミナーに参加した活動家たちが困っているのは、やはり資金不足。政府からの財政支援がないため、収入のほとんどを個人や企業の寄付、外国のドナー団体からの資金提供でまかなっていること。そして次に困るのが、政府や関係部門にボランティア団体として認められにくいこと。それでも多くのNGOに専従スタッフがいて、ボランティア登録者数も比較的多い。NGOの強みは「調和のとれた社会」を進めるために、政府の手が届



きにくい分野での活動が充実していることだ。多くの農民工支援NGOの場合、発起人自身が農民工出身であり、自分がした苦勞（給料未払い、労災認定、社会保険未加入や労働関係の法律知識の欠如など）を他の人にしてほしくない、自分の経験を伝えたいといった純粋な動機からボランティアを始めている。

セミナーで会ったNPO・NGOの中に、農民工の子どもたちが通う学校「新苑学校」創立者で校長先生の蔣茂堂さんがいた。去年12月には中国教育学会等の団体を選出する「全国優秀校長」となり、人民大会堂で表彰されたほどの教育者だ。そんな蔣校長と旧正月の帰省ラッシュが始まろうとしていた北京の中華料理店で会ったとき、彼は焦燥し肩をがっくりと落としていた。夜行列車で山西省に帰省する彼のリュックには「全国優秀校長」の立派な記念の盾とほんの少しの荷物だけ。2001年に初めて北京郊外に139名の児童と13名の教師で新苑学校を建てて以来、彼の学校は5回目の立ち退きにあった。彼が私財で建てた学校は開発のため撤去され、旧正月休暇後、600人余の子どもたちは別の学校を探るか、故郷の農村で両親と離れて学校に通うかの選択を迫られることとなった。

蔣校長の学校は都市戸籍を持たない農民工の子どもたちが通う私立の学校である。私立とはいえ

農民工の子どもが通うわけだから、学費は低く抑えられており、設備もお世辞にもよいとはいえない。北京では都市戸籍がないと公立学校に入学できないし、郊外にも開発の波が押し寄せているため、学校はできては移転するような状況だ。今年、新苑学校のように立ち退きにあった農民工の子どもたちの学校は30校以上にのぼっている。将来は北京でも農村戸籍であっても公立学校に入学できるようになるとの報道もあるが、都市住民の農民工への偏見や差別も根強く残っており、公立学校に通える＝問題解決とはいづらい。

学校はなくなったけれど蔣校長は負けてはいなかった。3月のある日、何気なく北京の地元紙「新京報」を開いたら、そこには1面いっぱいの蔣校長のインタビュー、そして全国優秀校長として表彰された彼の学校が翌月解散させられたと皮肉たっぷりに報じていた。もう一度学校を再開するために、机や椅子は売り払ったものの、パソコン、ピアノ、バスケットボールのゴールなどは保管している。自分自身が捨て子であり、両親の愛情が子どもにとって一番必要であることを知っている蔣校長。北京に出稼ぎに来た両親と子どもがともに暮らすことができるよう、今日も学校再開に向け日夜奮闘している。